

2020年2月16日 川越教会説教

## 羊飼いの背に負われ

丸山 勉

[聖書] ヨハネによる福音書 10章 1～18節

「はっきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。門から入る者が羊飼いである。門番は羊飼いは門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているの、ついて行く。しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。

イエスはまた言われた。「はっきり言っておく。わたしは羊の門である。わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。わたしは門である。わたしを通過して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。——狼は羊を奪い、また追い散らす。——彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」(10:1～18)

イエス・キリストは色々な言い方でご自分のことを自己紹介された。自己紹介とは、「わたしはこういう者です。どうぞよろしく申し上げます」ということ。相手に自分という存在を理解してもらいたいと思っている。つまり、相手に対して自分を“開いて”いる。私たちが自己紹介するというのは—自分を隠さないということ—は、その相手との関係を始めよう、始めたいと思っている時でしょう。自己紹介は、独り言ではない。今日の箇所でのイエス様の自己紹介の言葉とは、私たちに対するイエス様の、「招き」。それを受け止めて行きたい。

11 節、14 節でもイエス様は「わたしは良い羊飼いである」という言葉をおっしゃっている。今日の中心の言葉。また「わたしは羊の門である」(7 節)とか「わたしは門である」(9 節)ともおっしゃった。「わたしは羊飼いなのだ」、または「わたしは羊の(出入りする)門なのだ」という言葉は私たちにハッとさせますし、また私たちに優しい気持ちにさせないでしょうか。

考えてみると、イエス様は、社会的な肩書を持たない人でした。誰かにチヤホヤされることを望んでいるようなことは全くありません。むしろ周りがそのようにしようとすると、イエス様はスッと姿を消されたりしている。「わたしはイスラエルの教師である」などとも言わない。そうではなく、イエス様は「わたしは羊飼いである」と。私は嬉しいなあと思う。イエス様はご自分を羊飼いいになぞらえ、「羊」との関わりに生きることが、わたしがわたしである理由なのだ、とおっしゃっている。18 節には「父からの掟なのだ」とも言われている。

こういう聖書の言葉を聞くと、自分には肌が合わないと思われる方もいるのではないか。「私は羊飼いに世話されたいとは思わない。自分は羊なんかではない。どんなことがあろうが自分の力で生きていく、それが人生だ。羊飼いを必要とするほど弱くない」と。——私も大学生の時に教会に行き始めて、友達に、教会に行っているということの中々話せない自分がいた。「宗教に頼るなんて、丸山はそんな弱い人間だったのか」と思われるのではないかと恥ずかしく思ってしまった。つまり信仰を持つということは「逃げ」だと思っていました。

しかし、今ではそうは思っていない。イエス様は今日の箇所の中でも、ご自分がどんな羊飼いであるかという、羊を飼い馴らして過保護にするのではなくて、10 節で「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである」とおっしゃっている。羊飼いがいることで、むしろ豊かな命に生きようになるのだと。本当にそうではないでしょうか。

私たちはイエス様というお方について、この方は神の独り子なのだから、ひとり超越した孤高な存在だと思ってしまうことがあるかもしれませんが、そうではない。10 章の初めの所で、イエス様はご自分を羊飼いいになぞらえ、こう語られている。—「はっきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。門から入る者が羊飼いである。門番は羊飼いいには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いいは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、ついて行く。しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」(1-4 節)

ここで聞こえてくるのは、羊飼いと羊の「幸せ」な関係です。「羊飼いは自分の羊の名を呼ぶ」とか「羊はその声を知っているの、ついて行く」とある。羊が何匹いようが、その一匹一匹の個性と多様性を尊び、名前を呼びながら、そのかけがえのない羊の「生」を生きられるよう具体的な助けを下さる。そんな人格的で、体温を感じるような“近い関係”です。

そこには、羊たちが安心して休むことが出来る「囲い」もある。そしてそこに入る為には「門」を通らなければならない。羊飼いはその門を知っているし、7 節では「わたしが羊の門である」とさえ言っている。イエス自身が羊の為の全責任を担っているということではないか。

それはまた、羊の命を脅かす存在(盗人や強盗たち)からも守るということ。この羊飼いは、そのような「強い」守り手でもあるということです。逆に言うならば、羊たちは、実はとても無防備な、弱い者。敵に襲われればひとたまりもない。そのような羊たちであることを羊飼いは良く知っています。それだけではありません。羊たちは近視眼であって、簡単に道に迷い込んでしまう。そのような私たちであることを主は熟知しておられます。

イエス様は「わたしは良い羊飼い」とおっしゃいました！ これは、イエス様からの自己宣言です。私たちが頼んだから「そうなってあげるよ」と言われたのではありません。キリスト教の信仰というのは、まず神様が、イエス様が、私たちがガッチリと捉えて下さっているのです。あなたを見放さない、と。このことを私たちはよくよく受け止めてゆきたいと思う。けれどもそれでも、私たちは「あなたの囲いの中に守られるのはごめんだ」と言ってしまうことがあるかも知れません。しかしそれは神様を悲しませることではないか。

和田秀樹さんという精神科医が、今新型コロナウイルスの感染拡大のことで、船や施設で一定期間外出できない状況があった(まだ続いています)時に、ラジオでこんなことを語っていた。「日本人は他者に迷惑をかけるということをととても気にします。自分がとても辛く、病気や或いは痛みがあったとしても、自分のことより、それで家族や人様に介護などで“迷惑をかける”ことの方を気にします」と語っていました。確かによく分かる気もします。ウイルスだけでなく、「年をとったら子供たちには迷惑をかけたくない」などという言葉もよく聞かれます。けれども、はた思ったのです。私たちももしかしたら、「神様に迷惑をかけてはいけない。それは失礼だ。もっと頑張って強く生きないといけない」と思ってしまうことはないかと。しかし、それは、聖書が語る神様、救い主を誤解していることにならないか。イエス・キリストは、私たちに向かって言うのです。—「わたしは良き“羊飼い”である」と。

先日、女優の木村多江さんのインタビューの話をラジオで聞いた。—10 数年前まで

は、舞台上、とにかく平均点プラスアルファを取り続けなければならないと、それで頑張ってきた。初めて映画の主演の仕事をもたらした時のこと。その監督が演技に対して何度も何度も何度もダメ出しをする。どんどん追い込まれていった。(橋口監督は敢えてそのようにしたと今では思うとも)。その時にどうなったか。本当に自分は裸にならなければと思ったと。お芝居で何点以上を確保するというのではなく、閉ざされていた何かフタのようなものを取っ払って、自分をさらけ出してその役の人になる。2008年の『ぐるりのこと』という映画ですが、それで私は女優としてのスタートラインにつけたかと思う、と語られていた。

私たちもそうではないかと思う。“平均点”を何とか取ろう、取ろうとして頑張っている。私自身もそうかもしれない、そうだと思わされた。ダメな自分、弱い自分を認められなくなってしまうのではないだろうか。そうであれば、私にとって、また私たちにとって、イエス・キリストとは誰なのでしょう。イエス様は、ここで凄いことを言っていると思う。—「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」(11節)。15節後半でも「わたしは羊のために命を捨てる」と言われている。羊飼いが羊を可愛いと思う次元をこれは超えています！「わたしは羊のために命を捨てる」と。考えにくいことです。イエス様がこのような言葉を本気で語られた、その理由は一つしかないと思う。このイエス様という羊飼いの羊への愛は、半端な愛ではないということ。羊が消えてしまうことは、私の存在理由がなくなることと同じだ。つまり、羊飼いと羊が一体化しているのです。14-15節。「わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。」この「知る」というのは、「交わる」ということでもあります。父なる神と私一つであるように、私と羊も一つなんだと。私はこの一匹も失いたくない。だから、私はこの一匹のために私の命を投げ出しますと。そのように、イエス様は喜んで私たちの羊飼いになって下さったのです。

「イエス様、そこまでなくてもいいではありませんか」と言いたくなります。しかし、そう思うことは神様のなさり方を拒む高慢なのです。私たちの罪とは、自分自身の手や努力で何とかなるほど軽くはないものなのです。ですから、この話をされたイエス・キリストは、十字架でご自分の命を投げ出して下さったのです。

十字架は、旧約聖書イザヤ書 53:6 の成就と言われます。

「わたしたちは羊の群れ。道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。(さまよって行った)。主はその私たちの罪をすべて主は彼に負わされた」。

ヘンデル作曲の『メサイア』には、この聖句が歌われているところがあります。どこか気楽で明るく、しばらくさ迷い踊っていた曲調が一瞬停止して、最後の所で、気高く、そして静かに歌います。—「主はその私たちの罪をすべて主は彼に負わされた」と。

羊飼いは、羊を前に抱きかかえる時もありますが、羊の足をもって、自分の肩にかけるようにして背負う時もあります。十字架の主イエスとはそういう姿なのだと思います。イエス様は、私たち自身を離さず、どこまでも背負って、十字架も架かって下さり、そして、よみがえりの時には、イエス様の新しい復活の命の中に私たちを生かして下さるというそのお約束を下さいました。それはただ、私たち羊を愛する愛ゆえであることを思わされます。—“主は私の羊飼ひ、私は羊”。この立ち位置のなんと嬉しい、喜ばしいことでしょうか！

私たちは、この方の前に、強がる必要はありません。弱いままで大丈夫。いや弱いからこそ、イエス様が私たちの内に来て下さるのです。そして、一生の道のりを、あの詩編 23 編あるように、死の陰の谷に行く時も共に歩いて下さいます。やがて御国に招かれた時、私たちはきっと知るのだと思います。主がこの私を背負って歩いて下さっていたことを。

お祈り致します。

主なる神様、今日の礼拝を感謝いたします。…詩編 23 編の詩人は、自分の一生を振り返りながら言いました。「主は羊飼ひ。わたしには何も欠けることがない」と。…アーメン。